

# 池波正太郎

(1923~1990)

## 「浅草・本所・両国」 鬼平犯科帳の舞台を歩く

文川岸徹 写真 大高和康



【かど家】

東京都墨田区緑1-6-13  
TEL: 03-3631-5007

「二ツ目橋の『五鉄』という  
軍鶏なべ屋へ入って  
熱い酒をのませると、  
平蔵が何を問うたわけでもないのに、  
油紙へ火がついたように、  
へらへらとしゃべりはじめた。」  
『鬼平犯科帳 第1巻 本所・桜屋敷』(文藝春秋)

### 「浅草寺」

その人に出会ったのは浅草  
観世音・金龍山・浅草寺の  
境内であった。おまさは、山  
之宿のほうから境内へ入  
り、本堂へ参詣をすませに  
王門へ向って歩きはじめた。  
『鬼平犯科帳 第5巻 女賊』  
(文藝春秋)



東京都台東区浅草2-3-1

### 「大横川」



横川を北へ……入江町の  
河岸を左にながめつ、  
舟はゆつくりとすすむ。  
やがて、右手に法恩寺の  
大屋根が見え、そして、舟  
は出村町へさしかかった。  
『鬼平犯科帳 第1巻  
本所・桜屋敷』(文藝春秋)



東京都墨田区

### 「春慶寺」

十七歳の折に左馬之  
助は好きな剣術の修  
行をおもいたち、江  
戸へ出て、押上の春慶  
寺へ寄宿し、本所の高  
杉道場へ通い、こゝで  
長谷川平蔵と親交  
をむすぶにいたった。  
『鬼平犯科帳 第8巻  
明神の次郎吉』(文藝  
春秋)



東京都墨田区業平2-14-9

### 「アンヂエラス」



帰りぎわには「アン  
ヂエラス」へ寄つて、ダッ  
チ・コーヒー。これはも  
う、習慣のようなもの  
になつてしまった。  
『散歩のとき何か食べ  
たくなつて』(新潮社)

東京都台東区浅草1-17-6  
TEL: 03-3841-2208



江戸時代も半ばを過ぎた  
1787年。天明の大飢饉の影  
響で荒れていた江戸の町に、凶  
悪犯罪を取り締まるため、一人  
の男が「火付盗賊改方長官」に任  
命された。この男こそ長谷川平  
蔵——すなわち、池波正太郎が  
生み出した「鬼平」である。  
昭和の文豪・池波正太郎は、  
浅草の生まれ。少年時代の遊び  
場は浅草や上野が中心だった  
が、当時は治安の悪い一帯とし  
て有名だった本所や両国にも足  
を延ばした。学校を出て、株屋  
の仕事を始めると、吉原で遊蕩  
にふけることも多かったという。  
そんな池波正太郎の人物像  
は、鬼平の姿とびたりと重なる。  
鬼平は仕事に就く前、本所・両  
国界隈の無頼漢の頭として遊蕩  
三昧の日々を送っていた。その  
時の経験から人間の本质を見抜  
く目や鋭い推理力を育み、やが  
て犯罪者から恐れられる存在に  
なつたと設定されている。  
浅草から本所、両国界隈を歩  
くと、『鬼平犯科帳』に描かれた  
場所が次々と現れる。小説に幾  
度となく登場するのが「浅草寺」。  
太郎は必ず、水出しのダッチ・  
コーヒーを注文し、時には梅酒  
を混ぜて飲んだという。  
隅田川を越えた本所エリアに  
は、鬼平の剣友・岸井左馬之助  
が寄宿していた「春慶寺」や、鬼  
平が舟でたびたび行き来する  
「大横川」がある。大横川は現在、  
親水公園として整備されてお  
り、暑い夏に涼を取りながら散  
策を楽しむことができる。  
そして鬼平は、美食家でも  
あった。小説では鬼平が「五鉄」  
という店で軍鶏鍋を食べる様子  
が描写されている。その店のモ  
デルといわれるのが、両国駅近  
くにある「かど家」。6代目女将  
の馬場英美さんに聞くと、「先  
代の女将の頃、池波先生がよく  
いらしたそうです。軍鶏鍋をつ  
つきながら、お酒をたくさん召  
し上がって……とのこと。鬼平は  
池波正太郎自身——そう強く感  
じた。鬼平散歩だった。」